



3

「ふざけんじゃねえ！ あのクソ仇敵共と仲良しこよしが出来るかってんだ！」

と、そう頭ごなしに反対の意思と姿勢を見せる者がいる。

「うーん、もしうまくいけば、東西のいがみ合いが良くなるし、悪いことではないのかな……」

と、未だやや不安を抱きながらも、その事が成された結果の良い面に目を向けようとする者達がいる。

春花が告げた結婚話——しかも、その相手は明治初期から百年近くいがみ合って来た、東の総元締め、辰ノ神の跡取り候補だというから、これが組内で反対の声を中心に、ザワザワと……いや、轟々と嵐に風水が逆巻くように、取り留めもなく、まとまりもなく意見が飛び交わされることになっている。

そのせいで、今回の春花の意思に対し、一番近いところにいる、彼女の側近であり組の大幹部でもあるところの太刀の四聖においても、その意見は分かれている。利点を見て、控えめに賛成を示したり、不安点を掘り下げて——また、組員の声を反映して、慎重になるべきだ、と反対の姿勢を見せる者もいる。

獅士堂邸の内で暮らす武俠たちも、様々な思いに駆られている。連日大広間での夕餉の席では、表面上は春花の意向に従うように、また互いを牽制するように静粛に食事をしていながらも、ひとたび酒を帯ると大挙して春花に詰め寄り、涙ながらに反対の意見を訴えた。

そんなことが続くもので、春花は早々に食事を済ませ、場が納まらなくなる前に大広間を辞して行くことが多くなった。組員は不満と焦燥が募るばかりであった。中には、春花の寝室に忍び込んで、強引に繋ぎ留めようか、などと腹の内で作てる者もちらほらいる始末。しかし、それも命がけの行動になるので（上手いこうが行くまいが、ただでは済まないだろう。姐さんへの抜け駆け、一人掛けは男衆の中では極刑モノである。獅士堂一家には古くからそういう気風がある）一週間、十日と時が進むなかでもそういう痴れ者が現れる事は実

際にはなかった。

春花と雪絵の寝起きする離れには、昔から女侠に這い込み、一儀に及ぶ者の対策として、年の大半の夜に寝ず番が部屋前に鎮座させられる。左馬ノ介なども春花の信に値し、この番を任されるが多々あった。今回の結婚話の浮上で、その警戒の度合いは更に必要に迫られているのが、この長月の密かな獅士堂一家の内情であった。

そんな ^{かなえ} 鼎の沸くが如しの邸内で、組で一番反対派に頼りにされそうな立場の白峰は、しかし、特に感情を荒立たせることなく、平素通りに稽古に打ち込む姿をみせていた。

「師匠はなんもないんですか？」

そんな白峰に、若い衆の反対の声にうんざりしながら、黒原が話を振った。

「お前は今回のことに、あまり目くじら立てておらんようだな」

「……まあ、俺は姐さんが誰と添い遂げようが、別にいいんですよ。あの人もいい歳だから、それもいいんじゃないかと思いますがね。ただ、他の連中の中にゃあ、相手があの辰ノ神だつてえのが、やはり引っ掛かるのがあるようで」

そのところが、白峰にとってはどうなのか、と黒原は問いたいのだ。

「ふむ。確かにそこは懸案するところだ。しかし、あれも人を視る目はある。恋愛をして熱のままに、相手に利用される輿入れはせんだろう」

「そうすかねえ。ま、相手が相手で、政略結婚的にいいようにされるかもしれない、つてのが、三分の一くらいの意見じゃないすかね。だから、もし心配なさそうなら、それでいいんですが」

「それになあ、俺が何を言ってやれんだ？ あいつとは付き合いが長い分、色々あったから、却って余計なことは言えんよ。むしろ、あれが幸せをモノに出来るのなら、応援してやらねばならんと思ってる」

黒原は軽く息を吐いて、肩を竦めた。

「そんなもんすか？ しっかし、だったら師匠が反対してやるなって、皆に言ってくれりゃあ、少しは黙ると思うんですがね」

「……春花のことを思ってやれ、と言っても、皆それだけ不満も不安もある。

こればかりは結果が出てみないと、『ああ、良かったんだな』、とはいかんさ」
「……そうですねえ。ま、俺は稽古相手の気が散ってるのが気に障るくらいですし、なにより、こじれたらその時は暴れるだけだと思ってるんで、さっさとまとまるモンはまとまって、元の空気になってくれりゃあと、そう思うだけっすよ」

笑顔だった。

「春花さん、この度はお目出度いお話、お慶び申し上げます。清家の組も一同、此度の婚礼が円満に成されますよう、及ばずながらお力添えする所存です」

大量の土産の品と共に獅士堂屋敷を訪れた仁美は、いつにもまして、ニコニコと、輝くような笑顔だった。

そんな彼女に、春花はこちらも微笑みを浮かべて、嬉しそうに礼を述べた。
「ありがとう、仁美ちゃん。今は学期も始まったばかりだというのに、大丈夫なの？」

春花の問いに、仁美はレースのストールを威勢よく払って、大きく口を開けて言う。

「そんなことは今はどうでも良いですよ！ 春花さんがご結婚されると耳にして、これはもうお祝いしなければと、居てもたってもいられず臨時休学の届を出して、刀郷に参りましたとも！」

「仁美ちゃん、ありがとうね」

やや逸り気になっている仁美をなだめる春花の横で、そんな二人を見遣る雪絵は、どこか静かだ。しかし仁美は、今回の主役は春花だと言わんばかりに、そんな友人の様子をあまり気に留めず、春花に話を振る。

「で、春花さん。お相手がお相手らしいですが、そこは私、春花さんの視る目を信用しております。人や世間は、政略的なモノが入るとか、今後の郷内の政治がどうか言っていますが、細かいことはいいんですよ！」

それよりも、と仁美は口許をにんまりとさせて、目元まで山のようにさせて

身を乗り出すと、春花に喰いつく。

「その殿方との馴れ初めってどんなのなんですか？ どうやってお知り合いになって、ゴールインというカタチになったんですか？ 教えてくださいよオ〜っ」

「あははっ 仁美ちゃん、恋愛話は人並みに好きなのね。というよりも、そういうのが気になるお年頃なのかしらね。 うーん、でもどうかな。まだ式をちゃんと挙げた訳でもないのに、そんな馴れ初めとか、話すものでもないんじゃない？」

「馴れ初めというのがまだ不適當なら、その方との出逢いはなんだったのか！ 是非、その辺を聞かせてくださいよ〜」

おせ〜てくれよ〜お、と仁美は食い下がる。

その顔が何故か必死であり、いつも年齢以上に気を張っている侠客の良家のお嬢たる仁美が、年相応の恋に興味のある少女に見えて、春花は嘆息する。

「もう。しょうがないわね。少しだけよ」

「やった！ ほれ、雪絵もちゃんと聞いとけよ」

「……………うん」

雪絵と仁美を視て、前を向いて、こほんと小さく照れくさそうに、春花は話しだす。

「まあ、そんな大したモノでもないのよ。去年の暮れに、私がちよくちよく顔を出している読書サークルの会合があつてね、そこで初めて会った人だったのよ」

「初めて会ったんですか？」

「ええ。なんでも、かなり前から不定期で彼も加わっていたそうなんだけれど、たまたま顔を合わせることが無かったのね。それで、その時に 『珍しい顔がいるな』 ってお互いに話しをして」

「読書さーくる？」

話の途中で、雪絵が瞳を丸くして口を挟む。

「うーん、平たく言うと、本の同好の士の集まりね」

「会合って……、本好きが集まって、何をするの？ 評書会とか？」

「ふふ。本好きが集まったら、その場所では読む時間もあるかもだけれど、私たちの場合は語りあうのが本筋ね」

「ははあ、それで会話が弾んで仲良くなっちゃったんですね」

仁美の言に、雪絵はそんなものかな？ と首を傾げる。

人と集まる場所で、趣味の話をし、盛りあがって、それで仲良くなって、恋をして、結婚というながれが、雪絵には何か現実味を見い出せなかった。

「それはね、雪絵、私はいつも恋や出逢いに思うけれど、切っ掛けはどんなモノでも、様々あるものだし、あっていいのよ。出逢いのカタチは人の数だけあるし、あっていいと思うの。肝心なのは、馬があうかどうかでね」

「ふむー、春花さんが言うのと深いイイ言葉ですね」

仁美と春花が笑い合う。

「……でも、あの人——湊奈人さんがいいなあ、と思ったのは、あの人も武侠の端くれだったということ。武侠で本読みって、やや少数派みたいなのよ、この郷」

そうだなー、と雪絵は組員たちの日常を思い出す。

「そして、私たちはしたいことが似ていたの」

「したいこと？」

雪絵と仁美が、揃って首を傾げる。

「この郷と、シマと組と、刀を振るう者たちの在り方……こう在って欲しい、こうなったらこの郷もシマも、人々ももっと良くなるだろう……っていう、そういう考え方」

「あ～、理想で共感しちゃった、みたいな話ですね。ぶっちゃけて言うと」

「もう！ もう少しロマンチックに言って欲しいわねっ でも、その通りね。あの人の理想と、私の理想は重なるモノだった。私はあの人のしたいことを理解できたし、あの人も私の理想……在り方を読み解き、価値を見出し、理解してしまう、自分と同じだという気持ちを抱いた」

「は～、理解しあって、結ばれちゃったんですね」

頬に両手を当てて、上気する仁美。その横で、ふーん、と雪絵が小さく頷く。
「なんだよ雪絵。随分と冷めた反応だな。こんな面白い話ないのに！」

「面白って……仁美ちゃん」

「冷めているというか、なんか淡白だな。雪絵としては、やっぱり春花さんが
興入れしちゃうのは、不満なわけ？」

その問いに、雪絵は顎を触り、中空を見詰める。春花はその様子が、誰かさ
んに似でもしたかしら？ と思い微笑む。

「強いて、反対とは言わない」

「へえ、そうなのか。少し意外」

「そうね。私は今回もてっきり、妬かれてぶんすかされちゃうと思っていたわ」
春花の笑みに、雪絵は鼻息を吐き、肩を揺らす。

「そこらへんは、大丈夫。ただね、まあ皆も言っていることだからというわけ
でもないけれど、疑問に思うだけで」

「なにかしら」

「結局、これが大丈夫なら、それほど問題でもない気がするんだけど」

「うん」

「結局、辰ノ神って、どういう人らな訳？」

4

西の獅士堂のシマには、河川というものがそれほど目立ってなく、奥多摩の
ようにシマを深く分け入るほど、山が目立つ地形柄をしている。それに対して、
東西境界線をまたいで東のシマに踏み入ると、際だって気付くのが、それなり
に大きな川幅や脈流をもつ河川が走っていることだ。

代表的なモノが、やはり神田川や荒川が挙がり、こちらはスサノオノミコト
の氷川信仰で知られていたりするが、もう一つ。江戸川にも土地に根付く信仰
がある。それが、川の流れや氾濫を鎮め、水の齎す恩恵からくる豊作などを願
う、『水神信仰』だ。

水神——水辰。

そう。郷の東のシマ、そして、その江戸川の流れる土地——江戸川の本流と支流を臨める場所にある、明治初期より続く大社。

それが、東の総元締め、辰ノ神一家の本拠地である。

門衛がかがり火に入る夏の虫を視るともなく視る、そんな普段通りの夏の一時。その屋敷奥では、しかしただならぬ空気の中、数人の男たち——否、俵たちが膝を交えていた。

「重ね言うが、正気か兄貴!? あのメス獅子どもの組と婚姻を交わすなど！」

「飛呂人、少し口を慎め。仮にも、湊奈人が御簾中にと見つけてきた婦人の内方を、そのように言うとは」

「親父はそんな弱腰だから、奴らが力をつけ返すのを許したんじゃないかと、俺は昔から言っているだろう！」

静かに座す髪に白いモノの混じった男は、聞いていると随分感じるモノ言いだ、と思ひ腕を組む。血気に逸る飛呂人の言葉に気が削がれ、さすがに口を閉ざす。この男、その佇まいは年以上に世の中に対しての疲労を抱いているような、そんな印象だ。

だが、彼こそが、ここ辰ノ神本邸を治める現頭首。辰ノ神水蓮^{はらえど}祓刀である。

祓刀は、実子のモノ言いに対して、その通りだとするところがあるのだが、立場もまたあるのだろう、大儀そうだが口を開く。

「だがな、飛呂人。かつての汀を滅ぼした時代はあまりに悲惨で、苦しかったのだ。あの時代を生き抜き、立て直したのは互いの努力の結果だ」

獅士堂がいたずらに抗争を続けることをせず、そのお蔭で双方がシマの安寧のための治政に注力できた。そうしてきたことで、辰ノ神側としても十余年に亘って争い、傷ついた分の痛みと疲弊を癒すことができたのだ。祓刀はその点でも、実は獅士堂側に感謝して生きてきた。

それを実子たちに口することは、頭首としてあまりに弱さを見せることになると感じた祓刀は、そこだけは踏みとどまって来た。

そこに来て、長男、湊奈人が持ち込んだ、獅士堂の現頭梁との縁談話。

これに対して、組のトップである祓刀と、補佐役の四聖と対等の次期頭首候補の兄弟はこの日、初めて意見を交わした。弟、飛呂人は獅士堂に対して、典型的な怨敵観念を持っている。だから、祓刀たちは彼のこの反応を覚悟していた。だが、祓刀は思うのだ。

「確かに、儂らと獅士堂は昔からの仇敵同士だ。かつての争乱時代もその互いの流血は夥しく、より一層憎しみが強まった者も多い。……だが、あの時代の渦中におった者たちの半数くらいは、あの時代に疲弊しておるのだよ、飛呂人」

頭首であり、実の父の言葉に、飛呂人は奥歯を噛み、眉を寄せてしかめっ面をする。

この頭は本当に駄目だ、と心の中で怒鳴りつける。

「だから、兄貴の縁談で奴らと仲直りでもして、以後平和に暮らしていこう、とでも言う気か?! 親父も兄貴も、そんな落ちついているのは、そんな浅はかなことを考えているからか?!」

血を求めるかのようなギラついた目で、一方を睨む飛呂人。その目は、濁流がてらてらと光るように、危険な彩に見える。

「どうなんだ、兄貴!!」

話を振られた座に、胡坐をかく男は、もの静かそうな目で、昏い熱をもった弟の目を視返した。

「その通りだ、飛呂人。時代の傷跡は、組も、郷も、そして民も疲弊させた。父だけではない。多くの者がもはや無用な争いを望んでいない。俺は、そのために用意できる道が、あの人となら築けると感じたんだ」

「あの人だとッ かッ すっかり気を許した風だな。それでしかし、奴ら獅士堂によってながれた血はどうなる? 失った者たちへの我らの怒りはどうなる?! 彼らがいなくなった喪失と損失を、どう贖う?! あア!! これからの時代が良ければ、それでいいのか、兄貴よ!!」

「多くの者が逝ったことは、辛いことだ。それを忘れることはない」

目を伏せて、湊奈人は言う。飛呂人は、苛立ちを覚えて言葉を叩きつける。「そうか。兄貴は執務や諸事管理などがこの数年の仕事で、すっかり武俠とし

て現場から離れた。血を浴びる事が減ってはいるが、その心をなくしてはいないか」

「皮肉はよせ。お前が文官よりの私と対極の武官として、武俠の生業の現場を盛んに取り仕切ってくれているのはわかる。しかし、立ち位置が違って、仲間が死んだ痛みはある」

「その痛みが本物なら、なぜ奴らを許せるというのか?! そこが間違っているんじゃないのか、兄貴はよオ?! 本当に分かっているのか。奴らのスジの武俠が振るう刀で、共に立つ仲間が斬られて死んでいく、あの哀しさや怒りを!!」

湊奈人は息をつくとき、静かに弟の激情に濁る目を視て言う。

「分からないはずはない。もう何年も前、私が十代の頃には、多くの友が斬られ果てるのを、同じ空気の中で肌に感じた。だが、お前が言っているのは、自らの蒙る怒りだけに拠っているのではないか」

「なに……?!」

「こちらも委細なりふり構わず、獅士堂側の武俠を斬ってきた。元々の理由や、その時々理由はともかくな、互いの大切な者達を失っている。それなのに、お前は自分たちの失ったモノだけでモノ事を、両家の因縁の心の在り方を語ってはいないか」

哀しく、怒りを覚えているのは、獅士堂の者たちも同様だ——湊奈人はそう言いたいのだ。しかし、飛呂人は心底胸が焼けて爛れそうだ、という風に口を拡げて吐き出す。

「敵を斬るのは、自陣の利のためだろう。互いに抱く感情のためだろう。互いというなら、向こうも己どもの怒りを晴らす利の為に、我らの仲間を斬って溜飲を下げてきた。だから、こっちもそうしている。それで向こうの死んだ人間は、それこそ必要な代償だ。互いにとってというなら、それが本当だろう。これは、泣き寝入りした方が馬鹿なのだ」

「お前は……、本気でそんなことを思っているのか……」

祓刀が、哀しそうに顔を伏せた。

飛呂人は、自分たちが蒙る被害に対して抱く怒りが、正統なモノだとして怒

るという。それは、やられたらやり返すのは、こちらの怒りこそが正統であり、もし向こうもその怒りが正しいというのならば、それこそ互いに文句を言うべきではない、という考え方だ。

その理屈は閉じている、と湊奈人は考える。

互いに怒りと哀しみを呑み込んで、それ以上は思考停止して、それより先にあるかもしれない互いにとっての『よりよき未来』をなんら模索していない。そんな弟に、兄は閉口する。そして、同時に咎め、正すべきだと感じる。

それをしなければ、相互の怒りと憎しみを超えた先の関係というモノがあることを、心から理解し、祝福させることはこの弟には出来ない、そう湊奈人は思うからだ。

「だからか、飛呂人。互いの利のために、向こうの死を当然とする。だからお前は、度々に西のシマへの『水を差す』マネをしでかしてきたのか」

「火に水を差して、消せばよかったのだが、やはりそう簡単にはいかんがな。それがなんだというんだ、兄貴。武俠の指示は俺が皆と合意のうえで為している。何も口出しされることはない筈だ」

腕を組んで顎をあげる飛呂人に、湊奈人は刺すような視線を向ける。

「思い当るモノだけでいえば、丁度一年ほど前に、真庭念流の武俠に加勢を与えて、西で闇討ちをして回らせた、という話がのぼってきている」

「……………」

「そして、つい先日の境界線付近での電波塔建設予定地での、西方の視察団を狙った襲撃事件。あれも主力となる武俠は、ウチの西の四聖のシマから出していたと聞いた」

「それがなんだというんだ」

「そのモノ言いだと、必要なことだったかどうかは、イイ。それぞれ、刃傷の現場で刀を振るう者たちの、自らの心もあつたことだろう。彼らも納得して自らの刀を振るっていた筈だ。だが、『水を差す』マネは、互いの関係によくない行為だ。特に、後者は西方の役人が手続きをして為す公的なことだ」

ここで飛呂人は露骨に「ケッ」と湊奈人が口にした言葉につまらなさ

そうに唾棄する。

「互いの関係によくないだと？ どちらも奴らの傲慢な行いへの反撃であり、制裁だ。そして、それでも我らの仲間が失われた、我らは怒りを抱いた」

「.....お前の怒りの話は、少し易い気がする。それは兎も角、そもそも、西はこちらに対して境界線付近に入って、こちらへの余計な刃傷沙汰はほぼ起こしていない。だが、こちらは獅士堂側に水を差す」

一拍おいて、湊奈人は続ける。

「それだけではないぞ。秋の件でお前が送り込んだ武侠の一人ないし二人が獅士堂に捕えられた。しかし、彼らは五体無事に解放され戻ってきた。その間に、彼らは自分たちが辰ノ神の息のかかった者で、真庭念流の武侠に助勢したと告白したそうだ。だが、それ以後に獅士堂側の報復らしい攻撃はない。お前はこれをどう思うか」

「拷問の末に白状させたか。自分らの利のために、あっさり殺さず、太刀合いでの解決に抛らないマネをして、そこまでして報復しない筈がない。奴ら、その縁談で必ず何か仕掛けてくるつもりだぞ」

「飛呂人.....、お前は本当に.....っ」

祓刀が顔を赤くして身を揺り動かす。それを鼻で息をして見遣る飛呂人と、手をあげて父を制す湊奈人。

「親父殿。飛呂人は血の気の多い子供のようなところがまだあるだけ。いずれ分かる。獅士堂側が、こちらを許そうとしていることを」

「何を言っているんだ、兄貴。やはり、その女がいらんことを吹き込んだのか。その女を斬れば少しは頭が冷えるか」

「やれるのか、飛呂人。彼女は刀郷最強の名を持つ武侠でもある。お前の腕を見くびる気はないが、それでもいっばしなだけの刀技で、彼女をどうにか出来ると本気で思うのか」

飛呂人はさして表情を変えずに、とるに足りない敵を前にしたように悠然と答える。

「人間を殺す方法など、工夫次第だろう。つまらんことを言う」

「そうじゃないだろう。力に訴えず、相手の思慮を見ろというんだ」

「それが偽りでないと何故言える？　それが兄貴が騙されているのでないと何故言える？　そもそも、だから相手があつた獅士堂だという前提からして、結婚話など無理があるんだ」

「そこに可能性がある。そして、俺達は確かに人として認め、愛し合っている。それをお前が何を分かるというんだ」

「熱にうかされているだけということかもな。恋はなんとやらというでは……」

「もうよさんか！」

場が二人の兄弟が相いがみ合い続ける空気に包まれたのを、さすがの父、祓刀も黙って見過ごすことが出来なかった。そして、言う。

「飛呂人。お前は争いの果てに何も視ていない割に、失った怒りと憎しみに捉われすぎている。湊奈人。お前は人の痛みを分かり、それを許すことのできる懐のある女性を見初めた。このどちらに儂が次代を託したいと思うか、今、言おう」

「あア!!」

「……………親父殿」

そうして、二人の兄弟それぞれ温度差の違う目で見つめられ、祓刀はしかし、ここぞ頭首の胆力の奮い時と力をこめて言った。

「儂は、西との友好の可能性を持つ、湊奈人にこれから先、次期頭首としてやって行って欲しいと思う。そして、儂は湊奈人と獅士堂の春花という方との婚姻を、正式に認めたいと思う」

「！ ……なにイツ!!」

「……………ありがとうございます、親父殿」

そうして祓刀は席を立ち、一室を後にして行った。

その場に残された湊奈人と飛呂人の兄弟は、対座しながら、しばらく視線も交わさず、言葉もなかった。沈黙の中、ただ虫の音が座敷に響いていた。

ややあって、湊奈人が立ち上がり、部屋の出口に向かう。戸口で立ち止まり、飛呂人に向けて声を発した。

「頭を冷やせ、とは今の俺の言い切れることかは知らん。が、少なくとも、血を流すことだけが人との交わり方ではないと、俺はそう思う」

ギリリと、飛呂人は兄の背を睨んだ。

ゆっくりと歩き去る湊奈人。今までの口論の場が納まり、静けさが降りる辰ノ神邸。

その一室で、飛呂人は静かに……暗く逆巻く水流のような気持ちで畳を睨んでいた。

「邪魔だ……、獅士堂も、あいつらも、どいつもこいつも、何故こうも邪魔だ……ツ」

いなくなればいいのに。

そんな、子供のような考えの自分に、しかし高杉飛呂人は、込みあげるモノに確信を持った。

……続く。